

# 鮎の眼をした雪女

徳安達昌

1

まな板の上から逃げようと井戸に飛び込むと、下方がどこも赤い色になった。灼熱の溶岩の流れが三途の川と連なって亡者たちを囲んでいる。硫黄ガスが亡者たちの眼を傷つけ、汚れた布きれの涙が両目から垂れていた。湯浴みの女がひとり、立ち上がって近づいて来た。長すぎるような眉とひろがった口元、忘れてしまった思い出の相手であったろうか、死装束が風に舞いながらバタバタと鳴った。

背の高い赤鬼が、岩陰から手を伸ばして、わたしの足を逆手でつかんだ。白い牙と肉厚のまぶたが見下ろしている。落とされまいとつめを立てると、鬼の汚れた体がずるとすべってしまう。隣の小鬼が口をゆがめて何か言うと、赤鬼は、鉄棒の握り部分で、わたしの頭をゴツン、ゴツンとこづいた。白い蒸気のかなたから笑い声がこぼれた。

突然に朱色の王座が出現した。鉢巻をした青銅色の二匹の鬼が両側に立ち、王座に位置する閻魔大王がわたしを見ていた。閻魔大王を見るのはこれからはじめて、地獄と浄土を往来し、人の死後を決めるこの地蔵菩薩は。額に角板をめぐらし、青白い皮膚は網目の黒衣と黒ひげに覆われていた。

1

閻魔大王は無色透明の眼から光を放つようにわたしを睨んだ。ツバキが口の端にあふれて巢をつくっている。口の中を覗き込むと、褐色の空と山々……ふもとの境界に小道が通っていた。なぜか、懐かしく思われる山麓に暗緑の陰りがあって小川が流れていた。何かをすくって、川土手をはねまわる麦わら帽子がいくつも……子供たちが誰と誰なのか思い出すことができない。ガッン、閻魔の口が黒ひげの中に閉じた。

赤鬼が手を放した。うわっ！ わたしは針の山に墜落して行った。

2

川辺は、小学校の川魚の放流日のことだったろうか。麦藁帽子ば、自転車屋の息子や呉服屋、それに写真屋もかぶっていた。彼らは何年も前に死んでもこの世にいない。

日本海にせり出した生まれ故郷に山陰地方に似た寒さが来る。凍結型の気候は短い期間に限られて雪国の感じではないが、宮崎、鹿児島など暖流に囲まれて年中温かい陸地を九州の風土とする都会のひとつには違和感があるかもしれない。入りこんだ山岳地帯に朝鮮半島からの冷たい風が吹き込み、冬は平地

よりも気温が二度低くなる。年によっては大雪に見舞われて寒冷地に似た様相を示す。人びとは複雑なその変化を体感的に悟るのだ。

正運寺までの道は曲がりくねって、大きな木陰が山道に雪を落としている。ふもとを離れると、中腹にある寺までの道沿いには人の住む家が一軒もない。気候がよい時は歩いて一時間だが、今日は風もないし寒くもない。出かけるのが早かったから、昼までには寺に行き着くと思つた。爪革着きの高下駄についた雪を、道の真ん中にごとりとごとりと払い落としながら登る。長男の嫁が用意してくれた、酒を嗜む和尚への佃煮をふところにゆつくりと歩いた。

寺まであと三分の一というところに深い引き込み坂があり、くぼみに雷山地蔵と呼ばれるお堂がある。地藏菩薩とは、弥勒仏が世に現れるまで無仏の世に住み、六道の衆生を教え導くことを誓いとした菩薩のことで、像は慈愛に満ちた円満柔和な僧形、右手には錫杖、左手に宝珠を持つておられる。

およそ一時間かかって地藏堂の前まで来た時、雪が増して降り始めた。汚れ布を重ね着した石地藏の前に来て、変わることのない笑顔に迎えられると、ちよつとほえむ気分になる。一帯は山腹に沿つた山道で風が直接当たらず、休むには都合がよかつたが、銀色の世界を久しぶりに堪能し、ひとり闊歩(かっぽ)する喜びにひたつていたわたしは、歩き続けることにした。

同じ背格好だが又しやんではない。お千代さんかな？ 和尚が酒を買いに行かせとるんだろうか……灰色の影は、あとひとつ降りて曲がれば、誰かわかるころまで来ようとしていた。山沿いから左端に寄って待つことにした。雪がまた降りだした。うつむき加減のわたしに、遠くの足音というか履物の音は聞こえない。目を上げた瞬間、はっと動けなくなった。雪の中に浮き出た蟬人形……さわれば崩れそうな輪郭と灰色の奇妙なかたち。

一瞬、思つたのは、高祖山たかすのふもとにある大きな寺、銀龍寺で見た神楽の絵、高祖神楽の巫女装束で、白い小袖(白衣)に枯草色の袴はかま、千早の舞いだすきを羽織つた姿に長い髪の毛かみをつけていた。傘もささず、透き通つた着物の上半身をみせて女が寄ってくる。

わたしに気がついていない。着物の袖で口元をかくしている。

「あなた、寒くはないですか？」自分で、自分の声にうろたえた。

動かないものが動くのを見たように、女は慌てふためいた様子で脇をすりぬけようとした。布が揺らいで顔が見えた……自玉のあるところに窪んだ陰かげりが、唇の奥には櫛状のものが見えた。眼の前から横に後ろへと、わたしが来たばかりの道を後姿がはためくように降りて行く。魚がひるがえつたように視界から消えて行くこうとしていた。

お千代さんではなかつた。立ちすくんでいる間に地藏堂のある坂へ消えた。

妖しい印象がわたしを緊張から解き放たない。女の姿が見えた山際からすれちがった道まで、調べて

みることにした。寺に着くのが遅くなって、和尚が心配するかもしれないが、昨夜の夢のこともあってこの出会いが気になった。女が下りて来た坂道まで登り、また元の山道に戻ってくることを繰り返した。何も見つけることができなかった。自分の足跡以外に、それらしいものがない。

笹の葉が山道に散らばり強い香りがした。「雪女か…」子供の頃、ひとり寝るわたしに母親が語ってくれた、雪の地方に出るといふ怪奇なものが浮かんだ。

3

正運寺に着くと和尚が出てきた。さぞ疲れたろうという風にわたしを眺める。庫裏に招き入れながら「吉伸よしのぶさんには今しがた電話をした」と長男の名を出した。お千代さんが離れに布団を敷くのが見えた。「顔色が悪いのう…」和尚にはわたしは病人のように見えるのであるうか。雪の中で一度転んだ。雪駄の片方がはね飛んだので、田んぼの畦あぜまで拾いに降りた。脇の下の背中側が痛い、汚れているかもしれない。

お千代さんに脱ぐのを手伝ってもらって、寺にある別の丹前に袖を通すと落ち着いた。

和尚の前で横になるのは遠慮して、部屋の中真ん中で炎をあげ始めた大きな木炭火鉢にいざり寄る。お千代さんが酒の膳を用意し始めた。寺のガラス障子から見ると冬景色は趣きが深い。味わう熱い酒もよかった。長男の嫁がことづけた佃煮も和尚が喜んだ。

「酒が」強くなられましたな、和尚、言ってみた。

「抑えてはいるが、檀家が引きとめて帰してくれんのだわ」

和尚は急用がない限り、檀家の家族や親族の中に入る。人々は、酒の席であってもお寺さん（和尚さん）の話は耳をそばだてて聴く。それが風習のように根付いていて、気持ちに寄り添って降りてくる坊さんであることが慕われる。

『又さん（又四郎）の連れ合いが亡くなった時、わしに酒をすすめた。何も言えんまま、ふたりで朝夕まで飲んで、自慢の地酒を飲みあげてしもった…あの頃からだな』

「又さんもさびしくなった」熱燗あつかんの酒と気おけない和尚、時々顔を見せるお千代さんも交えて、すっかりよい気分になったわたしは、わけがあつて寺に来ていることをしばらく忘れた。

「昭男さん、急を要するようだな」和尚が口火を切る。「死相が出ておる」

言いにくいことを言ったように湯飲みの酒をグツとのんだ。

「何かきかせられるとありがたいが」わたしも始めた。

「変な夢を見てな。訊きたかったのはそれなんだが、途中でまた妙なものに会った」

家内の供養で和尚に世話をかけた。寂しさから遊興街に出て和尚と大騒ぎして支払いもせず別れてい

たが、……今回は焦点のある話になった。昨日見た夢のこと、今朝の影のような女のこと、言い外れないように言葉を選んで話した。

「関係があるかどうかはわからんが……」和尚は昔を思い出す表情で言う。

「お里さんではないかのう」

「お里さん？」名前に覚えがなかった。お千代さんが入って来た。

「天野さんの娘さんですよ、里美さんとかいう、わずろうっていた母親がこの間、元岡（県境にある）のホームで死にんさった」、言つて、口をつぐんだ。

記憶がよみがえってきた。疎ましく悔やまれる思い出が邪魔をしている。

里美の母親は、こつちに戻つて来てから死んだのか……。

4

『のう、あの老松町の天神屋だ』和尚がつづける。『天神屋の若社長も、変な格好のおなご（女）を山道で見たと父親が言うのを聞いたことがあるそうな』

寒の強い年に、店主の父親は死んだのだ。父親が地元高校の運動部の先輩だったことでわたしも知っていた。高校の剣道部で温和おどやな性格だった。町へ引越してから付き合いが途絶えたが、近くに住んでいる時は一緒に遊んだ。町に移った呉服屋の跡取りが八十才近くまで生きて、死んだことをその時知った。

わたしの場合は、地元高校を卒業後、通学範囲にある私立の単科大学を受験してうまく合格できた。関西の企業に入社してそのまま九州を離れて転々とした。高度成長の最盛期で、ただがむしやらに働くだけで営業の課長になった。職場の女を選んで妻にしたが、利口な女でよく諍いさかいもした。わたしがうわべを気にする人間だと見ぬかれていた。部長昇進の話が出た頃を発端に、部下から虚偽の報告が発覚して責任をとるかたちで左遷された。四十代半ばに、同業種の企業に転職して北九州に移り住んだ。

定年退職して、生まれ故郷に四十年ぶりに戻つて来た。

実直にただ誠実に生きた会社勤めの人生だったと思う。上司との軋轢はあったが父親のような破綻はなかったし、相対的にいい人生ではなかったかなと思う。天神屋の息子とは面識がないが、わたしの長男と同じくらいの年齢になっているはずである。

正運寺の先代住職は病弱であったが、わけあって、多賀神社の宮司の未亡人とその娘の里美をとてもかわいがったという。娘の里美は神社の歌舞である巫女神楽に興味をもち、神楽の絵巻を見るのが好きだった。踊りの方も結構うまかったらしい。神楽の舞手は習い事の修練者というより、神事の舞に従事

する者として周囲から崇められた。

先代住職の厳しい面構えは、消えかかった肖像写真に残るが、かくれた行いは周囲のものにしかわかない。和尚の実父のそのひとは、白内障で両眼を手術した後、厚い凸レンズのめがねをかけていた。死んでも黒ひげが白くならず人相が変わらなかったという。

「ずいぶんと前の写真だが、先代のはこれしかないから、額に入ってもらっている」

和尚が眼で指した。

「病気持ちだったが、わしを連れてあちこち修養の場に出してくれた。けど、しつけが厳しかった。殺生のたぐいはひどく叱られての、子供に対しても現実離れをした説教をするひとじゃった」先代の有様を思い出して体をゆらす。「虫捕りや魚とりなんぞはともできなかった。わしの子供時代はそんなふうに川で遊んだり、フナをすくったりしたことがない」川原で見た麦藁帽子に、子供の頃の和尚は入ってなかったようである。

明治の富国強兵の政府の元では神社の立場が高かった。神職免許は政府官庁より発行されたが、経済的な問題もあって神主のなり手はふえなかった。女性神職というのはあるが、多賀神社の未亡人（神主の奥さん）も、一度は考えたがなれなかった。資格を取る方法は神社庁長の推薦が必要で、完全に暗記し、必ず答えられなければいけない超難問の試験であったという。神主が早死にした多賀神社は家系の見直しに迫られたが、奥さんには手の届かない神職の資格とわかった。また、母と子の生計を伴うことが難しいものとわかった。しかし、若者向けに作られた華美な神楽もその筋にあったことで、資格がなくとも母と娘が巫女を舞う神楽が、母と娘の生活を得るために考え出されて実践された。

「お里さんは、これを見るのが好きだった」

和尚が書院の引き出しから巻物をいくつか持ってきた。先代がしまっておいたという神楽の絵巻物で、紙の地肌が透けて見えるほど古くなっているが、妙にきらびやかで明らかに近世に描かれたと思われる。江戸後期かと推察される神楽絵は、神社の境内で庶民が群れて、踊りを見物している。巫女と言うよりは布袋さんほていさんのような神職装束の女が足を見せて踊っていた。離れた社務所にも巫女がいて絵札を渡している。

神楽の舞を様式化して祈禱や奉納の舞とし、鈴・扇・笹・櫛くし・幣へいなどを持って舞う。遠くまで、祭り行事のあるたびに行つて泊まつて舞った。

赤の伊達襟を半襦袢と白衣の間に着け、緋袴、無地の千早に花簪を頭に飾り、神楽鈴を持つ。天冠をかぶることもある。千早の生地はかなり薄い。鈴を鳴らすことは、衰弱した御魂を奮い起こすと唱え、鈴の数は7、5、3で、布は、青（緑）、黄、赤、白、黒（紫）の5色布で舞う。

♪シヤン、シヤン、シヤン、シヤン、シヤン♪

「ここで母親とお里さんが踊るのをわしは見た」 和尚は池端の廊下を指した。

「先代は何度も見ておった。わしは面倒になってそう長くは見んじやったが」  
母と娘は寺の中で呼ばれて踊り、礼をもらっていた。

「お里さんは、同じ小学校の一級下にいたはずだ。あんたが遊んだという川原にもおったのではないか」  
和尚は言う。それならば夢と関連する。

「わたしが小学校三年生の頃、一級下の二年生だったのか、色の黒いはだしの女の子の姿がようやく浮かんできた。あの雪女は高校でも一緒だった天野里美だったのであるか。

小学生の頃、村の高祖神楽たかすが希少無形文化財として認められ、教育委員会から郷土文化の芸能として推奨、保護されることになった。愛らしく化粧をした子供たちが演じる子供神楽クラブが小学校にできた。里美も加わり、りりしく踊るのをわたしも見ていた。

5

わたしは普通科のガリ勉強コースにいたが、天野里美は女子生徒ばかりの食物被服科にいた。紺色の制服姿で、長すぎるような眉と広がった白い歯の印象が残る。同期のガリ勉コースに医者の子がいて、彼女を好いて話しかけたが相手にされなかったと聞いた。

里美の視線がわたしの方を向いていると感じた時期もあったのだが、それ以上うかがい知る機会はなかった。わたしが高校を卒業する頃、里美は退学していたのではなからうか。制服姿を学校では見えない。福岡市との県境に進学高校ができるまで、糸島には農業の専門高はあっても男女共学の普通高校は一校しかなかった。男女共学の普通高校は、同じ世代の若者たちが青春を味わい、思い出を作る大事な場所と言ってよかつたらう。

雪中登山という学校行事が行われた時のことである。地藏堂の裏側に、小幅な水の流れがあり、悪童たちが、行き来する魚影を見て石を投げはじめた。掬すくう網が見当たらないので、遊び半分に小魚を傷めて捕まえる方法を試みていた。魚の一匹が石に打たれて、白い腹をくねくねとみせて流れはじめた。下半身がちぎれかかっている。下流の淵に赤い登山靴の里美がいた。袖をたくしあげて川面に手を伸ばそうとするのが見えたが、登山靴では川の中に入れない。

山歩きのばかでかいゴム長をはいた、わたしも下流にいた。雪の日は長靴に縄を履かせる(まきつけると)と滑らない。登山靴をもたないから父の長靴を履いていた。背丈のあるゴム長でゆっくり川の中に入ると、水がはいってこなかった。

魚をすくって里美の手に移した。魚は彼女の手の中で浮かんだ。

長い眉の里美の眼が大きく瞬いて揺れた。

「やめてー！」上流に向かって言った。

悪童たちはおもしろがつて石を投げるのをやめない。「当たった。どうだ、オレのがあたったろうが」言い合っていた。里美は白い歯をむきだした。

「生き物は生きている間が修業なの。この生きものが、あなたたちのお父さんやお母さんでも平気？」祭事を手伝う娘に父親が日頃言う言葉かもしれないなかった。

生きることが修業と言われても、生きていることの価値を考えようとしてもしない年頃はかりであった。わたしにも分からなかった。苦笑いして

「もう、やめんばー！」勇気を出して言った。

悪童たちは今度は向こう岸に石を投げはじめた。

「いいやねえか、めったにあたらん」「おー、こわっ！ 巫女さんが言うんじゃない。罰が当たるけんな」悪童の中に札付きの義弘や東原たちもいた。

里美は死んだ魚を自分の手でまた川に流した。

里美の母親はあちこち流浪して年老いてから本岡の老人ホームに入ったが、市の養護施設に移って死んだという。あれこれあつたらしく、借財を重ねて色きちがいの後家さんなどと言われたりしたが、身一つのまま死んだ。死んだ時は先代住職がなくなつて久しかったが、今の和尚が知ると市の指定霊場を訪ねて位牌を持ち帰ってきた。まったくの無縁仏にするというわけにはいかなかったのであろう。

娘の里美はそれより前に死んでいたのだが、わたしの耳には入っていなかった。母と娘が祭礼を巡回する旅をしていた二十二、三の頃、縁があつて壱岐の漁師の網元に嫁いで、幸せな日々が続いていた。女の児をひとり生んだが、お産の後、体を悪くして別の病やまいにかかり、長引いて、その年の冬、壱岐の病院で死んだという。

生まれたこどもは父親の家族がしっかり育てあげている。神楽衣装の姿は母親にも似ているが、年若い死んだ母親が今頃、あんな風に現れて、悪さをするだろうか。やはり娘の里美か……かすかな思い出が幻影を作り出そうとしている。

思い出せないはずはない。高校三年の夏、母親と里美に地藏堂の前で会った。美しく成長した娘に会っているのだ。「心のなかにやましいことがあると見ええないものが違って見えてくるものだ」と和尚は言う。誰にも話していないことがある――冥土に行つてから里美に謝らねばならない。

高校三年の夏、正運寺に受験合格の祈願で参詣した。わたしは詰襟の学生服、母と叔母が一緒だった。世話好きの叔母は父の法事のたびに、世事に長けない母と同行して、正運寺に足を運んだ。父はわたしが高校に入る前に鉱山事故で死んでいる。閉山に伴う爆破作業に立ち会って被災したのが元で闘病して死んだ。正運寺からの帰り道、地藏堂の前を通り過ぎようすると、堂の縁端で白装束を薄緑の半合羽

で覆った同じ格好の二人を見かけた。笠をかぶって腰を下ろした女と後ろ向きに寝そべった女がいた。

じりじりと暑さを増す、夏の日差しを避けたひと時に思えた。祠ほこらの裏手には、笹がざわつく竹やぶが、その手前にユキツバキ（雪椿）がまばらに生えて背の伸びきらないイチジクの木があった。横になった女の伽半きゃはんをつけた足がすれる音と、いびきが聞こえた。艶のあるほほに髪をたらし、年上の女は、疲れた寝相を見せていた。

若い娘はわたしたちに気がつくつと、目を上げて微笑んだ。きれいな襟足が見えた。美しさに引かれた。娘が制服の姿しか知らない天野里美だとすぐにはわからなかったが、長すぎるようなまゆと歯ならびのよい口元に気がついた。生徒会の委員でときどき校門の外に立つことがあったので、自分の顔は他の生徒に知られていたのかもしれない。じつと見ていた目を覚えている。

「こんにちは、暑いですね」そういうつもりが黙った。叔母がひどいしかめ面をしたのだ。

母も口をむすび眼をひそめて、休もうとせず離れて歩き出した。叔母が小声で

『色キチガイが、坊さんをたぶらかして罰があたるくさ！』と言った。

はつきり聴こえた――娘にもきこえたらう。聞こえなかったかのように、見てほしくない人に見られたように、娘は横を向いた……ユキツバキがざわめいた。

その娘をあらうことか、知っている悪ガキ四人が誘い出して辱しめた。悪ガキの、産婆を伯母に持つ義弘が、腰ぎんちゃくの東原と組んでいやがる写真屋と呉服屋の息子を引き入れた。二人はついて行っただけだが、結局、四人組が里美を強姦したということになった。娘は翌日から学校に出てこなくなった。そのまま、休学した。

表に出すまいとしてもこの手のことは、隠しようがない。うわさが広がった。いわくのありそうな男が四人組の親を呼び出しはじめた。

「金の代わりに田んぼや山があるもん。ひとの娘の人生をどうおもつとるんか」

親たちは言われて取られた。呉服屋と産婆と写真屋は金を、腰ぎんちゃくの親は田んぼや山林を金に換えて取られた。なぜかうちにも来た。その日わたしはいなかったが、「何の因縁をつけるか、昭男は試験に出かけてその日はいなかった」母がつっぱねると男は帰ったそうである。

何も知らなかったのだから、わたしは何もしてないのだから関係ないとその時は思った。実際、大学の受験日にあたるその日は、違う方向に出かけていたことがはっきりしている。あの娘がそんな目に遭ったことを知る由よしがなかった。義弘と東原は事件が表に出ると高校をやめた。退学させられたのである。義弘はその後も出生地を離れて暴力沙汰を繰り返し、銃刀法違反で手配されるなどして行方不明のままである。提灯持ちの東原は五十代半ばで早死にした。

写真屋の息子は卒業後、親戚を頼って出奔し大阪で住宅会社に就職して不動産業を学んだ。五十代に

なつて帰郷し僻地を開拓して販売しようとしたが、土地の水吐けが悪く役所に申請を繰り返したが、資金繰りが悪くなり困窮して自殺したという。親たちが金を払い当事者たちの姿が消えた後もうわさが長引いた。娘の母親が金を渡して男に交渉を頼んだことも先代住職の耳に入り、いろいろ取りざたされることが起こった。

わたしはそれよりもなぜ、あの賢い娘が悪ガキたちに簡単におびき寄せられて出かけて行ったのかわからなかった。一一程なくしてそれは、わたしが書いた一枚の偽手紙が、そのきっかけを作ったということがわかって動転した。

夏のある放課後、腰ぎんちやくの東原が、狭い二階の生徒会の部屋に来た。

「好いとる女子（おなご）ができたけん、昭男、お前の字ならよかけん、これに書いてくれ。俺ん字はとも見せられんけん」いつもと違う神妙さで頼んできた。つい、気軽に応じてしまった。B5のレポート用紙一枚の呼び出しラブレターだ。

一度、殴られたことのある東原が、にきび面をくずして生徒会の部屋に来た。だましてわたしに手紙を書かせたのだ。《とても会いたいから……十曜日の五時半に地藏さんの前で待っててください》、そんな風の簡単な文で、自分が名前を書くから下半分はあけてくれと言われてそうした。どんな女が相手なのか訊く由もなかった。東原は、背後の机で、封筒を持って「ごちよごちよ何かやりながら待っていた。あの時、生徒会委員のゴム印を押して後で手紙に貼り付けたのだ。

義弘の下卑な企みであった。わたしに書かせた手紙が天野里美を呼び出すのに使われたと呉服屋の息子が、時がたって、打ち明けた。彼が届け役を請け負い里美が登校してきた時に渡したという。封筒の中身をのぞいたが人の名前はなかった。名前をだれと書かずに、生徒会のゴム印が貼り付けてあった。それを天野里美が大事そうに制服のポケットにしまった。手紙を書いた相手を、わたしが書いたものと同じく思っただろうか。

わたしは怒り狂った。義弘の策略に、はまった自分のおろかさかたまらなく情けなかった。振り慣れた木刀を自宅に取りに戻り、自転車にはさんで義弘が帰ってくる道に先に行つて待った。義弘の背は高くないが体操部に属し筋肉隆々という体つきをしている。わたしはひ弱な体格ではあるが、剣道部で鍛錬しているの、木刀があれば手足の一本を必ず折ってやる。その気だった。一一暗くなるまで三時間待ったが、義弘も東原も、その日は、その道を通つて帰つてこなかった。義弘と東原は退学相当の悪行を犯したとして、この日を境に退学させられて姿を消していた。

その方がよかつたのかもしれない。怒りに燃えて悪ガキに挑んで何か起こしておれば、わたしが天野里美の事件に関与していたことが明らかになつたらう。和尚には偽手紙のことまで話したことはない。

あまりに、おろかであった自分を知られたくない。里美はすでに死んでいる。短い期間ではあったが、  
壱岐で幸せにすごしたというならそれは救いだ。

自分を残してみんな死んだ。和尚の言うとおりになら、死んでしまったひとの霊が今更、誰かに頼まれ  
て出てくることなどあるものか。雪女の姿はわたしの弱い心が自分勝手に作り出した幻影に過ぎないの  
ではなかるうか。

そして二年目、凍るような冬が来てわたしは雪女の正体に出会うことになる。

## 6

家内の数珠は、祈祷をしてもらい、肌身離さず持つようにした。和尚が時々顔を見せてくれと言うので、  
その後も長男のジープの送り迎えで寺に通うことになった。  
すぐに三ヶ月が立った。

年寄りの身であれば死ぬことはどこ吹く風と、わたしが元気な様子を見せる一方、長男は仕事が多忙  
になり、頻繁な同行を面倒くさがりはじめた。気候が良い間、わたしは、またひとりで、寺参りを楽し  
むようになった。医者にも行った。小学校の校医をしていた医者が年老いて、息子が院長の内科病院で  
診療している。医者はクレアチニン（腎機能）の値が悪いと指摘するがそれ以外に悪いものがない。腎  
機能の低下に特有な症状が出ていない。血圧やコレステロールの薬も服用しよく歩き運動をしている。  
現代医学では悪化を抑える療法はあまりない領域のようだ。

要するに今の元気であることを楽しみなさいということか。

次の冬が来る頃から、孫がジープにしばしば同乗した。男の子だ。

学校が終わる頃、父親と迎えに来る。「じい、なぜ、お寺に来る？」

「死んだら寺で世話になるから、今のうちになじみになっておくんだ」

いつまでも健康で孫の顔を見れるのはありがたい。

また、凍るような冬が来た。

「昭男さんの死相は消えよるんだかな」和尚から思い出したように言われた。

その日、寺に長くいた。酒を飲む時間ももう少しあったのだが、

「波多江のじん作さんがなくなっちゃったげな、この雪の日に」電話を取ったお千代さんが和尚にささ  
やいた。入院していた脳神経外科病院で甚作さんが今しがた亡くなった。仏ぼんさんの家族、縁者らが通夜  
の齋場に向かったという知らせだ。明日の具体的な予定も知らせてきた葬儀社からの連絡だ。「葬儀社の  
車が五時に迎えに来ますので、よろしいか」と。「あん人は、もう少しもつかな、今日ではなかるうとい

うことではあったのだが」

つぶやきながら和尚は出かけることをすぐ承諾した。つや（通夜）の弔いは和尚ひとりでよいが、明日の斎場での葬儀にはもう一人付き添いの僧侶が要る。準備をはじめながら、和尚は手筈を書いたメモを見て別の寺に連絡を入れはじめた。

酒が入ってしまった和尚はうすめるためと言って水を飲みまに台所に走った。

家に電話すると長男はまだ帰らないが、時間に間に合うように出ていくという返事であった。和尚は葬儀社の車で出かけた。雪がおさまり落ち着いた冬日和になっているので、わたしも早めに寺を後にした。下り坂の途中で長男のジープと会うことになるだろう。蛇の目傘を小脇に、もらった山芋を右手に抱えて、寺の前の坂道を降りはじめた。

二十分もしないうちに地藏堂の前に降りてきた。地藏堂の前は一部、コンクリート舗装だが、表面に水が出て、小高い畝が凍りついていて滑って転ばないように、丹前のすそを持ち上げながら注意して歩いた。

雪が止んだ山を背景に、地藏堂が妙にポーと明るくなって見えた。時計をみると五時半をすぎている。冬ならば大分暗くなっている頃で、おかしなことがあるものだなーと足を止めた。ところが、今までになく、体がだるくなり疲れを覚えてしまった。めまいもしてきた。思わずお堂に近づいて腰を下ろした。休んでいると雪が降り出した。

これはいかん、引き込み部分から離れていないと迎えるの車には見えまい、立ち上がろうとすると、誰か坂の上から来るのが見えた。では、あの人が降りてくるまで待つかと眺めていると人影は、地藏堂の方へ急ぐともゆつくりともつかない足取りで、浮いたように近づいてきた。

あの、雪のような女であった。はっと、戸板の影に隠れて、息を殺した。女は通りすぎると思いの外、向きを変えてこっちへ来る。もう逃げることはできない。縁の片側で体を硬くして動かなかった。白い女は凍った地面を越えて堂のひさしの下をぐぐって来ると、反対側に立った。そして、ひっそりと腰を下ろした。小さなお堂であるから間隔が二メートルもない。女は白い雪が降り積もったようにして坐っている。

恐ろしさを忘れて横目で観察すると、時々、体を震わせているのがわかった。長い髪に似せたかたちは、今日は巫女姿ではなく、やつれた白い着物を着た雪のかたまりに見えた。

「寒くはないですか」また、つまらないことを言ってしまった。女は、音もなく立ち上がり、石の地藏さんの背後を移動して、裏手の竹やぶの前まで抜けると、後ろ向きにとまった。それから、まねくようにゆつくりと振り返った。

「昭男さんはごげん大事なもんを……」その頃、寺ではお千代さんが火鉢の横に置き忘れた数珠に気づいていた。長男のジープはふもとの家を出たばかりであった。

7

雪女は、地蔵堂の裏の地面に立ってこつちを向いていた。

吸い寄せられるように立ち上がり、一步踏み出して後を追おうと、目を外したら消えていた。前には、千疊敷の白い原っぱ――木の頭部がとび出したあたりに、イチジクの赤茶けた葉が埋もれて、赤いツバキの花が白い布団の花模様に見える。絡まった竹の根が凍りついて、押されたように盛り上がっているが雪女の姿はどこにもない。

――突然、目の前の雪のかたまりが崩れて、肩から上半身を突き出した雪女が姿を現した……強い笹の香りがする。怪しい妖気に打たれて、わたしは震えた。

――やがて程なく、いつの間にか、いつの間にか、わたしが、雪女を抱いていることに気がついた。沈みこんだ手が女を抱いている。雪女の体は氷を抱いたように冷たく痛く、体温を吸収する。凍る冷たさが体の中を奥深く進行する。胴から下がちぎれてなくなったような感覚……まわりの景色が、めまいを起こして傾く――意識が遠のくにつれて体が回転をはじめた。

――雪女が小刻みに体を動かしながら、生気を取り戻しているように思われた。顔の凹凸がはがれ落ち、濡れた皮膚が現れる。鼻孔が四つある。眼はどこに……眼球は、真横に飛び出して、それぞれが別の方向を見ていた。ぐるぐる動いて白眼になる。この眼は……前に見たことがある。

――見るものから、見られているものにわたしは変わった。雪女を抱いているのではなく抱かれている。胴から上のわたしの体が走馬灯のように震えながら廻っている。ぼんやりとしびれた視線の先に、伏目がちの顔がじっと動かない。獣ではない。哀しく宙を見つめるような眼にじっと見られていた。忘れかけていた記憶――手のひらにすくいとられた小魚をいとおしむように眺めていた眼、主張するところを認めてもらえない悔しさにうつむいた眼……残り少ない温かみを吸いとられて、わたしは氣を失いかけた。

朦朧とした意識の中に、誰かの呼ぶ声が聞こえた。そして、生き物が離れる感じを衝撃のように感じたがわからなくなった。

わたしの目に、朝日に染まるガラス障子が見えた。布団に包まれて畳の部屋に寝かされていた。和向が深刻な顔をして枕元に座っている。長男が横におり、嫁の姿も見えた。

医者は今帰ったところのようだ。気がついたようだ。と和尚は、湯気の立つ湯飲みを安心したように自分の口に運んだ。「まだ息があつたのでな、お医者さんが来る前に寺に運んで、暖めたのがよかった」「…」「通夜に連絡が来たので急いで寺に帰ってきた。坊主が帰ってきてても何の役にも立たんでの」安心した和尚が冗談めかして言う。あれからだいぶ時間が経っているのだ。「医者が来る前に逝ってしまわないかと心配した」

凍死寸前の人間に対しては病院へ駆け込むにも医者に来てもらうにも、一刻の猶予もない判断と救急措置が要る。秒読み状況の中で長男がお千代さんのいる寺に運んだ。お千代さんと長男が介抱の手を尽くしてくれたのだ。

長男は寺まで迎えに来たが、「先刻、出らしゃったばかり」、お千代さんに言われて山道に戻った。暗くなり始めた坂道をジープで降りながら探し、薄暗い地蔵堂に山芋の包みが落ちているのを見つけて裏手に回り、雪の中に倒れ込んだわたしを見つけた。

「大急ぎで運び込んで介抱したというが、体が冷とうなつてのう、とても助かるまいと思われた。わしにも責任があると思うて」和尚は鼻をすすった後、声の調子を変えて、「何であんなところに、気味の悪いほど満足げな表情でいたというのがよくわからんが…よか、今は何も話さんでよか」と言った。とにかく昨晩はお千代さんと、泊まりこんだ長男がわきめを振らず看病してくれた。田舎の内科医も電話でたたく起こして来てもらったのだ。

和尚は、賢作さんの葬儀があるのでこれからまた業者の車で出かけるという。

「葬儀が寺でダブツタらどうなることかと思つたぞ、昭男さん」言われて、枕もとの数珠を持たされた。この起こりを話そうとしたがわたしは、安堵の眠りに落ちていった。

数日経って気分がよくなったので、心配をかけた世話になつたお札を言うために、あらためて正運寺を訪れた。しかし、結局、寺ではあまり話しせず、長男のジープに和尚も同乗してもらつてすぐに寺を出た。昼過ぎに三人で、例の地蔵堂に降り立った。

石地蔵の脇をすり抜けて、その晩のことを思い出しながら地蔵堂の裏側へ回ってみた。

和尚が後ろで、石地蔵へ手を合わせるのを見た。

雪女が立ち止まった通路のような地面は存在しなかった。そこは大きな岩に囲まれた、地蔵堂の柱を浸す水溜りで、竹の樋から流れ込んだ水が、何本もつららとなって突き刺さっていた。イチジクの葉が浮いているところに、竹の柄杓が一本、柄を跳ね上げるように凍っている。

「ここんとこだな、昭男さんが倒れとつたのは…」和尚が指したところに溶けた跡があり、それにまた、薄氷が張っていた。奥の方にも低い岩があり、水の浅い流れが竹の根をかくぐつて上を通ってい

る。山からの流れがここまで続いていった。

長男が身をかめてうなづいた。わたしは雪の塊を胸に当てて、ここで死と隣り合わせの陶酔にいたのであろうか。女を抱いていたはずなのだが、そうすると、それは半分、わたしに体を預け、半分は、自分を水に浸したまま凍りついていたことになるのであろうか。わたしの体温を吸い取ったものは、やがて、水の中に逃げるように、わたしから離れた。魚の跳ねるような波の動きも、衝撃のように感じた。水をくみ出す容器はないかとあたりを探した。竹の柄杓（ひしゃく）しか見当たらない。手をかけて引きはずそうとした。「父さん、何をするつもりなの？」足元の悪いところに立って動く父親の袖を息子がつかんだ。手を押し戻して、「この前の晩、恐ろしい目にあった。はじめは、浮いた幽霊のようだったので、年のせいで、あらぬものを見たと思ったのだが、水の中にいたものには何か実在する生き物といった情念があった。水の中におればそやつがそれだ」と、わからんことを言った。

深くないこの水溜りに化け物があるかもしれないから、水をかい出して正体を見届けたいと言いなおした。加齢で思考がおかしくなった父親を見るようなまなざしを、長男が、返してきた。聞いていた和尚は、「吉伸さん、済まんが、ジープにあるバケツをとってきてこの水をくみ出してやってくれんかの、底はみえてくると思うんで」と言った。

長男はジープから工事に使うバケツをとってくると、器用に水をかい出し始めた。

落葉が泥になって、厚く沈んでいる層が出てきた。沈殿物が多い、扱にくい水溜りだ。

「この下にも深いところがあるようだ」長男は、あえいで休んだ。

「年寄りばかりで、手伝えずに悪いのう」和尚がねぎらいの言葉をかけた。

「昔はよく流れていたが、水質の方に問題があったようだな」和尚は、自分の少年時代とおぼしい頃のことを口に出した。裏手に鉱石を採掘しはじめた山があつて、小規模な設備で精製するところもあつた。しかし、精製過程で生じる有害物質を含む水が、ふもとの田んぼに流れ出ていた。二十年たった今は、下流で何種類もの魚が姿を見せ、アユ釣りなども回復している。「自転車屋の息子が、竹の輪とイチジクの葉っぱで網を作るのがうまかつた。金魚掬いと言つて遊んだ」わたしもここまで登って来た子供の頃を話した。

採掘跡を埋め立てる時、後始末に発破（ダイナマイト）を使う作業が必須になり、爆破作業に不慣れな父が無防備に加担して被災した。長靴に穴があくような、近い爆破から逃げ切れずに負傷して、それが元で、寝たきりになって死んだ。父の左足を巻いて汚れた布を、母が何本も洗濯して、熱湯を通し、竿に乾していた記憶がある。

「あつ、いた！」長男が叫んでバケツの端をもち上げた。溶けきらない雪のどろどろ浮いた水面に何かわからない、ゴワゴワした生き物の体表がすつと動いて見えた。

魚は窪みへ追いやられ、岩に突き当たって水音を立てるようになった。

「鯉（コイ）だ、でっかい！」石を置いて踏み場を作ると、長男はその上を長靴で移動して追い詰める作業をはじめた。魚はからだの3分の2ほどを水面から出して走り回ったが、長男の持つバケツの中に飛び込んだ。体長は三十センチメートルあまり、皮膚に白いまだらがあつて見かけはよくない。病気にかかった魚のように見える。

「鯉（コイ）じゃない、アユ、鮎だよ」飼育魚には水温が変化して細菌や虫がつくと、ヒレが溶けたり体に白いブツブツが出来て穴があいたりするものがあるが、バケツの中の魚はスレ傷がいっぱい白い綿状のものが生えている。皮膚炎は完治したものの新しい傷が加わったという感じだ。

桁外れな魚をバケツに入れて正運時へ戻ってきた。和尚は、自分の部屋に引きこもつて考えことをしているのか出てこない。わたしと長男は、池の端の火鉢の部屋にとどまって温まりながら、和尚が出てくるのを待つことにした。長男はバケツの中を覗き込みながら単純に喜んでいる。

寺には人工的な小さな池と品格ある情景が広がる。頭や腕に金色の飾りをつけて踏ん張る青鬼や炎の輪を背に剣を抜いた仁王像、地獄の番人たちが並ぶ広場に足を踏み入れた。

ステンレスの焼却炉の方に降りて来ると和尚に出会った。先代住職はレンガの焼却炉を望んだが、高温での大量焼却やダイオキシンの対応できるのでこれに決めた和尚は話す。

わたしの顔をながめて、「ほほう、昭男さん、死相が消えとりますな」、また同じようなことを言う。

一緒に火鉢のある部屋に戻った。「この魚は何年も余計に生きたものに違いないが衰えていない。傷はもがき傷で病気跡は癒えている。生き残ったと言うだけで化け物だが、水溜りにアユがいたということも不思議だろうな」わたしもうなづいた。

「考えてみると、それほどおかしいことではない」と和尚は言う。「昔からあそこは子供たちがよく登ってきた。川で採った魚を岩のくぼみに浸して遊んだりすることは、子供のやりそうなことで、放した魚がうまく岩の裂け目に隠れお世話か、忘れ去られたりしてとにかく住み着いた」推論を交えた。「寺参りはあそこで握り飯を供えたり、残り物を投げ込んだりする。手洗い岩の下にあるから食べ物のはたまる。冬の間もイチジクやツバキが落ちてくる。海まで行けなかったアユにも生き延びる条件があつたのではなからうか」

「しかし、困ったことが起きたのだろう」と話し続ける。「寒さが厳しいと全部、凍りついてしまう。底まで氷が張り詰めて一緒に凍ってしまう。何度も難にあつて逃げたらしい」

「外皮が剥ぎ切れて、もがいたキズだ」わたしもバケツの中を指す。

竹の根の絡んだ下で刺しぬかれた傷 魚が凍結から逃げおおせたという証だ。

「今年は寒が強かったのでいつまでも氷が消えない、逃げそこねて氷付けになった。春までは命が持たぬ。さて、絶体絶命に陥ったことであろうよ」

「これからがわしのまったくの想像だがな……聴いてみるか？ あれは、地蔵さんに助けを乞うたのではないか」和尚は、神妙な目つきを言った。

耳を疑った。これからどんな話になるのかと長男も耳をそばだてる。

9

「一緒のところで生きた魚だから、地蔵さんも何とかしてやろうという気になられたのかもしれない。魚を人の姿に変えて、惑いの心を持つ人間が現れたら、ここに引き入れようと待っていたのではなからうか」「昭男さんが女の姿を見たと言ったあの日から、あれが、取り付こうとしていたにちがいない」和尚はお茶を注いだまま、しばらく黙った。

和尚が作り上げたような話で信じられない。わたしの表情を見て、和尚は声を落とした。

「老松町の天神屋な……父親が昭男さんと同じ高校の出身じゃった。おなご（女）の姿を父親も見たと息子が言っていたことは話したが、父親が寺に来てわしに会った時、《和尚さん、自分はある地蔵さんか》ともえずか（怖い）《》と言ってから、数日して死んだのだ。家族に看取られて、親族、縁者に取り巻かれての大往生であったので、地蔵さんとの関連には、考えが及ばなかった」

柔和な顔の地蔵さんがあの年老いた呉服屋の死に関連があるとすれば、すれば……わたしも因縁でつながる。背筋が寒くなった。信じないわけには行かない。同じ場所で糾弾されるべき生け贄が、別のところで、先に死んだのだ。

バケツの魚は長男の手を借りて寺の池に放した。魚はすぐ見えなくなった。

身の安泰を願って和尚の傍らで念仏を唱えると、幾分、救われたような気持ちになる。

「お里さんのものが残っている。あれも燃やしてしまおう」和尚は言って、先代住職の部屋から薄緑色の横長い紙箱を持ち出して来た。「吉伸さんに、少し手伝ってもらってよいかな」、箱の中から巻きものをとりだして小脇に抱えこんだ。

「お里さんのものは一度処分したのでこの巻物だけだ。大事なおった神楽のな」

長男も何本か、すくうようにして抱えた。「金目のものは残っていない、お里さんが大事にしていたものだ。燃やして送ってあげたらよろこばれる。吉伸さん、いいかの？」

和尚は下駄に履き替えて焼却炉の方へ歩き出した。

わたしはふたが開けられた紙箱を見た。天野里美の私物が入っていたという箱だ。

じつと見ていると、茶色の底の、ヘリに、何かへばりついたような用紙があるのに気がついた。境のはつきりしない端をつまみあげると、小片が外れて落ちた。裏側のやや白いところに野線が見える。何が書いてあったのかは読めないが、それこそ、わたしが高校三年の時に書いたラブレターのB5用紙だ。わたしは……うめいた。

インク跡の多くは消えているが――わかった。もう一枚の切れ端には、生徒会のゴム印が押されて貼り付けられていたものだ、今では自分しか知らない。生徒会の部屋で悪童の東原に頼まれて、わたしが戯れに書いて、呉服屋の息子が天野里美に手渡した偽りの手紙。もらった天野里美が、書いた人間がわかったようにすぐ制服のポケットに入れたというあの手紙だ。それが今頃、出てきた。

「吉伸さん、残りは箱ごとでよい。箱ごと持って来て」和尚の声が焼却炉から聞こえた。

長男がとりに戻って来る……紙片一枚を袂たもとに入れる。巻物を一本、広げて見入る振りをした。巫女が足を見せて神樂を踊っている。「父さん、もっていくよ。和尚さんが待っておられる」長男がわたしの手からとりあげて箱ごと持って行った。

「昭男さん、持って帰ってはだめだ。そんな中には天神屋の息子が返しに来たものもあるんだぞ」、遠くから和尚の声が届いた。里美のものはもって帰ってはならない、和尚が言ったのに、わたしは持って帰ってきた。

## 十

春が真近にきている日差しを感じながら、部屋に一人でいた。長男夫婦と孫たちは朝から町へ出かけた。新しい乗用車が半分電気で走る構造になっており、静かな乗り心地を楽しむために家族で県境の高速道路まで足を延ばすと出かけた。

証拠があったのに、母親が関わりのある者をしつこく訊きだそうとしたであろうに、里美は手紙を表に出さなかった。捨てずにとっておこうとしたようだ。あこがれていた男女共学の高校生活が思いがけぬことでかなわなくなり、里美の青春は破綻した。父親のいない荒んだ母親との生活に戻ってゆかねばならなかった。

同じ気持ちになって回顧しなければならぬ。お前も父親を早く亡くし、気丈な母親と生活する家庭にあった。同質の境遇であったにもかかわらず、人の気持ちを顧みることなくすごしてきた傲慢しょうまんな人生ではなかったのか。

里美はお前を好きだったにちがいない。お前も悪い気持ちがしなかったはずだ。だが、そんなことうつつをぬかしておれない貧乏症の考えがお前にはひどかった。

お前には男女の青春は必要なかった。見かけだけの実直さや誠実さだけが取り繕えれば、それでよかったのだから。

手紙が表に出ないようにして里美はお前に罰を与えず、お前の生き方を許したのだ。

高校二年生だった若い里美、なんと……むごい、そして、つまらなかった自分の存在と悔やむ。自分の軽はずみと冷淡な性格をわびる相手はもうこの世にいない。何が実直で何が誠実な生き方なのか、わずらわしさとその軽さを、この年になつて気づかされる。

今になつて涙をこぼすのだ。

手紙は、燃やしてしまうことにした。台所から一番大きな金ダライを借りてくると、手紙をタライの底に敷くように入れてチェッカー（ガス点火器）で火をつけた。

コタツの天井板にタライを乗つけておいたが、炎が消えた頃も、うつすらと煙が出てくる。

煙は天井にのぼり横に這いだした。あとからあとから、煙が増えてのぼる。部屋の障子の棧が見えないくらい濃くなつてきた。何でこんなに煙が出るものかと、訝り出す頃、白い煙は霞のように広がって、外の景色が見えないくらいになった。

白い気体は周囲をおそらく、屋敷の四方まで、ひそかに取り囲んだように思えた。

わたしは立ち上がった。霧の中からシャン、シャンという鈴の音が聞こえてきた。

ここは長崎県の杵岐、玄海灘に浮かぶ九州で8番目の大きさを持つ離島だ。

六人のお地蔵さんが海に浸かっている。はらほげ地蔵さんのはらほげとは、お腹に穴がほげているという意味。6体の石地蔵が海の方を向いておられる。

遠く海際で、巫女姿の少女が神楽の舞を踊っていた。鈴を振りながら踊り、踊りながら声を出して鈴を振る。唄声は地蔵さんたちの背後にいるわたしに聞こえてきた。

風が霧を押し流すように吹くと、あたりが晴れ渡り、波打ち際でおどる少女の装束や裸足がはっきり見えた。巫女姿の顔は、まだ、こちらからは見えない。

唄に、ある種の音階と韻律があり、言葉の意味が耳に入ってくる。

『なぜ、お地蔵さんは、六人いるのか』……『人間が死んだときに行く世界が六つあるから』……『お地蔵さんは苦しむ人を救ってくれる。閻魔さんになったり子供になったり』

白い霧がたなびく海原に、閻魔王の楼閣や人影がうごめく灯籠が現れた。

そこには、死んで何年も経つわたしの妻や父母、兄弟、さらに里美の母親や父親たちもいるのであろう、低い声が追いかけるように調子を合わせて唄うのが聞こえる。

みんなでただ唄う。海の上から来る大合唱だ――すべてを。

わたしが為した恥ずべき行為や間違つた考えを、すべて、みんなが知つたのだ。

『天国道とは生きているときに善行を積み、良い行いをした人が行く』

『地獄道とは悪い行いをした人が行く。閻魔王が審判して地獄の責め苦を受ける』

『修羅道とは争いごとを起こして命を落とした人が行く。来る日も来る日も戦い切り裂かれる』『畜生道とは動物を虐待した人が動物に変えられる。弱肉強食に身をさらしおびえて暮らす』『餓鬼道では食べ物をお口にに入れようとすると灰になる。餓えと渇きに悩まされて腹がふくれる』『人間道とは生きている人間が生活する。喜びはあるが苦勞も多い、生きていたくない人がまた行くところ』

正運寺の先代住職に似た閻魔王が現れて、白い眼でにらみをきかす。

入れ歯の口元をもぐもぐさせて、唾を飛ばすと、叫び声をあげて鐘楼からとび降りた。

少女の巫女は、踊りながら鈴を振り、六体の石地藏さんが並ぶところに近づいて来る。

サギが一羽、右端の地藏さんの足元に降り立った。波打ち際の石の上に片足を乗せて、眼をつぶったまま動かない。土色のまぶたがいつまでも動かない。

わたしは思った。ここは香岐か……ならば神楽の舞を踊っているのは、香岐で里美が生んだという子供か？ 残された家族が育てているという女の子にちがいない、と。

巫女はどんどん近づいてきた。――話に聞いた里美の子ではなかった。

美しい白装束に、長すぎるような眉と、きれいにそろった歯並び。

赤の伊達襟を半襦袢と白衣の間に着け、緋袴、無地の千早に花簪を頭に飾り、

神楽鈴を持つ。千早の生地はかなり薄い。

鈴を鳴らすことは御魂を奮い起こすと唱え、鈴の数は、7、5、3で、

布は青（緑）、黄、赤、白、黒（紫）の5色布で舞う。

「シャン、シャン、シャン、シャン、シャン」

若いときの里美、そのものであった。哀しく宙を見つめる魚の眼をしていた。

あなたは自分のことしか考えない。自分に問題が起これなければ何も思わない。利己的で無関心な男、そう言っている眼の表情をしていた。

大きな金色の鈴をわたしの頭上に振り上げて打ち振って鳴らした。

「シャンキン。ズシンーと景色が震えた。あなたが行く世界はこの中のどれになるでしょう、考えただけでもぞつとしませんか。あなたのようになずるい男がいつまでも長生きしてはいけません。そう思いませんか……シャンキン。ズシンー、景色が変わった。

地藏さんたちが山のように高くそびえ立つ。何がどうなったのかと這い出してみると、六人の地藏さんがわたしを見ていた。

『迷いがある人はあらぬものを見るのだよ、昭男さん』正運時の和尚のせりふが重なった。老人がただ、のうのうと生き続けてはいけない、それでは意味がないのだよ、と。

シャキーン、ズシンー、サギが立ち上がって羽ばたく。ツルに似る長い脚と嘴くちばしが、震えながらのびた。自分の体は、だんだん、縮んで姿を変えていくのがわかる。

シャキーン、ズシンーとまた変った。ムカデに似た多足の長虫に変わった。

赤と黒のけばけばしいまたらが交互に尾まである胴体をくねらせて、波打ち際を必死で、逃げ回る。それを起重機のように聳え立ったところから、サギが銜くちえた。

胴体が背中についてよじれた。もがいて逃げようとすると、跳ね上げて呑みこんだ。

「うわ！」濡れた暗い洞窟を落ちて行った――最初の夢がよみがえる。

湯浴みの女が、ひとり、立ち上がって、ニーッと歯を見せる。長すぎる眉とひろがった口元、会って別れたほろにがい思い出の相手であつたろうか。固まった長いものが眼から垂れている。泣いているのだ。赤鬼の左足には無数の傷跡、汚れた布が幾重にも巻かれていた。ほどけながらくるくと、わたしに巻きついた。隣に、小鬼が出てきて、

「お前、お天道様の下を歩けるのかい」と言う。背の高い赤鬼は、鉄棒をもちかえて、わたしの頭をゴツンゴツン、とこづいた――父母の姿を見ていたのだ。

観念して横たわるわたしを、帰ってきた家族が離れのコタツの部屋で見つけた。焦げたにおいがして、障子と柱の間で切れた数珠が敷居から畳の端まで散っている。仏壇が傾いて、父母や老妻の位牌も倒れていた。てっきり、脳梗塞か何かの発作が留守中に起きて、息が絶えていると思ったのだが、起こされたわたしがどこも悪くない表情で

「人間道か……生きていたくない者がまた行く世界だ」言ってしまった。

孫の男の子が入って来た。「じい、死んだの？」

どうやら里美が一番優しい道を選んでくれたようだ。

「わたしはまだ死なんのだよ。これから、しっかり生きるのだよ」

いとおしい孫をかき抱いた。生きていることは修行なのだ。

長男はわけのわからない顔をしてタライを持つと、嫁と出ていった。